様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　１７日現在

機関番号：12611
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008　～　2010
課題番号：20520320
研究課題名（和文）　バーナード・リーチと民藝運動に関する比較文化的研究

研究課題名（英文）　A Comparative Study of Bernard Leach and His Involvement to the *Mingei* Movement

研究代表者　　鈴木　禎宏（SUZUKI SADAHIRO）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：80334564

研究成果の概要（和文）：
本研究はイギリスの芸術家バーナード・リーチ（1887-1979）の活動と、柳宗悦（1889-1961）が主導した日本の民藝運動を題材として、対抗産業革命 counter-Industrial Revolution という観点から 20 世紀の日英の文化史を振り返った。リーチと柳、及びその周辺の人々は、芸術と生活という観点から、産業革命がもたらす負の要素を批判・是正することを工芸分野において試み、ある程度の成果を上げた。本研究は、リーチ、柳らが携わった対抗産業革命の理念とその実践を解明し、対抗産業革命という視点が 20 世紀の文化史研究に有効であることを確かめた。

研究成果の概要（英文）：
The research project considered the cultural history of the twentieth century Britain and Japan in terms of “counter-Industrial Revolution”, taking the art and life of Bernard Leach (1887-1979) and his involvement to the *Mingei* (Folk Crafts) movement as an example. Leach and Muneyoshi Yanagi (1889-1961), the leader of the movement, conceptualized their movement as a counter-movement against the cultural mainstream in those days. Their ambition was to put a curb on negative elements brought about through the process of modernization by discovering new virtues in things that have been suppressed by the process of modernization. The research project analyzed the idea of “counter-Industrial Revolution” and its practices in reality, and showed an efficiency of this viewpoint.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：比較文学比較文化／生活造形論
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：バーナード・リーチ、民藝運動、スタジオ・クラフト、対抗産業革命、工芸、比較芸術、比較文化、イギリス

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまでバーナード・リーチの生涯と芸術に関する基礎研究を行ってきた。リーチと言えば一般には、20 世紀のイギリスを代表する陶芸家として知られ、19 世紀にウィリアム･モリスらが興したアーツ･アンド･クラフツ運動を引き継ぎつつ、「スタジ

オ」に基盤を置いて制作にあたる活動形式を切り拓いたことで評価されている。一方日本において、リーチは柳宗悦らが興した民藝運動の「同人」として地方民窯で制作を行ったことで知られている。イギリスでも日本でもリーチはそれなりに高く評価されているが、しかしそうした評価の際の論点は両国では一致しない。

しかし、研究代表者のこれまでの研究は、リーチ本人は日本でもイギリスでも首尾一貫した理念のもとで活動していたことを明らかにした。リーチから見た場合、スタジオ・ポタリー運動と民藝運動は、ともに前世紀のアーツ・アンド・クラフツ運動を引継ぐ運動として認識されており、リーチの自伝にはこれら二つの運動に共通する特徴が「対抗産業革命 counter-Industrial Revolution」という言葉で述べられている。

この「対抗産業革命」という視座 には、これまでとは異なる光を近現代の日英の文化史にあてる可能性がある。確かにリーチが言うとおり、アーツ・アンド・クラフツ運動、スタジオ・クラフト運動、民藝運動の三者は、大局的に見ればどれも産業革命への対応だったと言える。既に論じられている通り、18 世紀後半にイギリスで始まった産業革命は、その後世界各地に波及し、社会的・文化的状況を一変させていった。自然を抽象的な数字や記号体系へと還元し、操作可能な対象と見なすことにより、人類は科学技術を進歩させ、生産の効率を高めた。そして、技術革新と工場制機械工業の推進の結果、 20 世紀後半までには大量生産・大量消費という、物質的豊かさが先進国にもたらされた。こうした中、前述の三つの運動は世界を席巻していく物質的価値観に対しそれぞれ異を唱えた。すなわち、手作りの工芸品の美しさを語るという行為によって、言語(記号)化されないものや、意識化されないものの価値、そして身体を通じて自然と接することの重要性を擁護したのである。このようにして擁護された価値観はその後紆余曲折を経て今日まで存続し、様々な生活文化論の立脚点となっている。

スタジオ・クラフト運動や民藝運動に関する研究は、日本においてもイギリスにおいても活発化していたが、しかし 20 世紀のイギリス工芸と日本工芸の関係を考察する研究はまだ端緒についたばかりであった。また、「対抗産業革命」という観点に立つ 20 世紀の工芸運動史に関する先行研究は、管見では見つかっていなかった。

２．研究の目的

本研究は、「対抗産業革命」という観点から 20 世紀のイギリスと日本の工芸運動を振り返り、工芸への関与という手段によって、どのような価値観が、いかに擁護されたのかを考えることを目的とした。

その際の論点は二つある。すなわち：①18 世紀後半にイギリスで始まった産業革命が、20 世紀のイギリスと日本にそれぞれどのような影響を及ぼしたかと、②19 世紀後半に産業革命への反省としてイギリスで始まったアーツ・アンド・クラフツ運動が、20 世紀のイギリスと日本でどのような反省と行動を促したか、である。

これを考えるため、本研究はバーナード・リーチと日本の民藝運動の関わりを題材として取り上げ、彼らの活動の分析を通して「対抗産業革命」がどのような理念のもと、現実にどのように展開したかを跡付け、考察した。

３．研究の方法

本研究の具体的作業は、二つの部分から成る。すなわち：(1)バーナード・リーチの生涯と芸術に関する基礎研究の継続と、(2)「対抗産業革命」という観点から、民藝運動（及びスタジオ・クラフツ運動）を分析することである。

その際、次の４つの観点に留意した。

① 「対抗産業革命」の理論： 民藝運動の自称「祖父」であるリーチが、民藝運動の本質をどのように理解していたのか。
② 「対抗産業革命」の実践(ⅰ)文化の生産と流通：リーチは日本各地の民窯を巡って作品制作に従事し、都市部の百貨店や画廊でそれらを販売したが、こうした一連の行為がどのような形で民藝運動の展開や各地方の産業・文化などの振興と結びついたのか。
③ 「対抗産業革命」の実践(ⅱ)文化の消費：リーチの講演・執筆活動は、彼や民藝運動の活動を正当化する一方で、新しい日本文化観をつくりだしたと考えられる。こうした一連のリーチの主張は、どのように受け止められたのか。
④ 「対抗産業革命」の帰結：民藝運動（及びスタジオ・クラフツ運動）は、どのような問題を解決し、そしてどのような新しい問題を引き起こしたのか。さらにこれらの運動は現在、どのように評価できるのか。

本研究ではこれら４つの大きな問題を考えるにあたり、1920 年代末から 1960 年代前

半における、リーチと民藝運動当事者達の言動と、その時々の社会的・文化的情勢を主たる分析対象とした。

４．研究成果

三年間を通じ判明したことを、（１）バーナード・リーチの生涯と芸術、（２）民藝運動、（３）対抗産業革命論という 3 点からまとめると、次のようになる。

(1) バーナード・リーチの生涯と芸術に関する成果としては、①ダーティントン・ホール時代の評価、②作品論の深化、③リーチの言動が担う政治性、という３つの点が上げられる。

① 従来日本で言及されることがほとんどなかった、ダーティントン・ホール・トラストという、イギリスのデヴォン州における共同体建設運動とリーチの関わりについて論じ、「バーナード・リーチとダーティントン・ホール:『中量生産』をめぐって」（藤田治彦編『芸術と福祉：アーティストとしての人間』所収）として発表した。この論文はリーチがこの事業に参加することで「対抗産業革命」の思想を実践しようとし、結果的に失敗したこと、そしてダーティントンでの経験が彼の第二次世界大戦前と戦後の活動を繋ぐ転換点になっていることを明らかにした。

② リーチの作品の基礎研究として、岡山県倉敷市の大原美術館の協力を得て、同館が所蔵するリーチ作品すべてを実況見分した。その結果、リーチの芸術の展開、コレクションの形成過程や、大原家によるリーチ及び民藝運動に対する支援の実態が、具体的に判明した。中には、従来の定説を覆すデータの発見もあった。ただし、そうしたデータを集約し、発表するまでには至らなかった。

③ リーチの言動を批判する際の視座として、植民地という観点があることを見出した。日本の「外地」におけるリーチと柳宗悦の交友関係（浅川伯教、巧兄弟など）や活動（朝鮮民族美術館での展覧会など）を追うことにより、彼等の主張の根拠と志向性を見直し、ひいては「対抗産業革命」という 20 世紀の文化運動が帯びる政治性について考察を深めることができた。「対抗産業革命」という、「西洋」の「近代」を批判する理想主義的思想がもつ政治性は、日本の植民地だった当時の朝鮮においてリーチというイギリス人の口から語られる時、それは二重の意味で現地の文化的状況を抑圧するような響きをもちうる。ただしその一方で、リーチはそうした発言とは別に、朝鮮陶磁器を肯定的に評価し、自らの作品にその研究の成果を取り入れている。リーチや柳らの主張が担いうる政治性については平成 22 年にソウルで開催された第１９回国際比較文学会にて英語で研究発表したが、今後さらなる議論が必要である。

(2) 民藝運動に関する成果としては、①運動史の歴史記述の問題、②「民藝」という価値観の創造のメカニズム、③民藝運動への評価の問題という、３点がある。

① 民藝運動の歴史をいかに論じるかについては、平成 20 年に大阪で開催された第６回デザイン史デザイン学国際会議にて英語で研究発表をした。その要点は、(ア)民藝運動には工芸運動としての側面と思想運動としての側面があり、これら二つを切り離して論じることは誤りであること、（イ）民藝運動の歴史を語る際には、柳宗悦ら東京の日本民藝館を中心とする運動の主導者たちの視点だけでなく、地方の視点からも運動を記述していく必要があること、(ウ)その際には「対抗産業革命」という理想と、それを実践する際に起きる矛盾に、地方の側がどのように向き合ったかを実証的に跡づけていく必要があること、の３点である。

② 柳宗悦らが「民藝」という造語を用い、既存の価値観を批判しつつ新しい価値観を主張していく過程に関しては、岡山県倉敷市における民藝運動の展開が示唆的であることを見出した。その過程はまた、美術における『白樺』派の活動とも軌を一にしている。

前述のように、大原美術館所蔵のリーチ作品の調査を行ったが、これはまた倉敷におけるリーチと民藝運動について基礎研究を行う機会ともなった。

調査の過程において、リーチが白樺美術館に寄贈した絵画作品（オーガスタス・ジョンの素描「ドレリア」）も現在同館で所蔵されていることを確認し、その詳細を「大原美術館における白樺美術館所蔵品について　バーナード・リーチ旧蔵オーガスタス・ジョン≪女の肖像（ドレリア）≫とヘンリー・ラム≪浜辺の女達≫、≪浴み≫を中心に」という論文にまとめ、『大原美術館紀要』に発表した。

この研究は白樺派の美術受容や大原美術館の性質を考察する内容であるが、結果的には白樺美術館建設運動と、倉敷における民藝運動の展開の親近性を示

すものともなった。すなわち、『白樺』同人も民藝運動同人も、新しい「物」(「後印象派」の絵画や「民藝品」) を提示すると同時に、それに接する際に必要な新しい態度 (「鑑賞」や、「直観」を用い「直下」に見るという作法) を提唱し、実践し、普及させた。こうした主張のもつ新しさは、大原孫三郎・總一郎といった企業人の理解と協力を得て、倉敷に根付いていった。新しい時代の新しい価値観を追求する倉敷側の主体的な取り組みは、白樺美術館の旧蔵品が大原美術館に集約されていく過程や、倉敷民藝館の設立にも現れている。

この事例が示すように、民藝運動を考えるには運動の同人ばかりでなく、各地方の主体性と、「対抗産業革命」への理解の程度を考慮する必要があるといえる。

③ こうした過程と運動の力学の結果日本に根付いたものの見方 (「芸術 (美術) 鑑賞」や「直観」) は、現在の文化の基盤を構成するものであるが、それはまた現在の我々の目を制限するものでもある。その意義と問題点を考えるには、朝鮮半島など東アジアにおける「美術」の普及や民藝運動の展開を考えることが有効であろう。ただしこれは、本研究の目的と方法を越えることであり、ここではその可能性を示唆するにとどめる。(これについては、鈴木禎宏「展覧会評『「白樺」誕生 100 年　白樺派の愛した美術』展」、『ジャポニスム研究』30 号、2010 年、102-106 頁参照。)

(3) 対抗産業革命論

以上のようなリーチと民藝運動に関する研究成果を踏まえ、対抗産業革命の問題に戻りたい。これに関しては、以下の三つの見通しを得た。すなわち、①アーツ・アンド・クラフツ運動の遺産、②同時代のインドとの関係、③試金石としての植民地である。

① アーツ・アンド・クラフツ運動はイギリスから世界各国に伝播していったが、それがイギリスよりも遅れて近代化を開始した地域によって受容されると、この運動はその地域にもともと存在した近代化以前の生活様式や文化を、近代化という流れの中で存続させる方向に働く。その際には近代以前の状態が理想化されることになるが、その理想は近代化によって生じる諸問題の裏返しとして表明される。アーツ・アンド・クラフツ運動に見られる中世主義は、実際には反近代というよりも、近代化によってもたらされる諸問題を批判しつつ、近代化を補完するという、「対抗」運動を用意する。少なくとも柳宗悦が牽引した 1960 年頃までの民藝運動についてはこうした理解があてはまる。

今日、19 世紀後半から 20 世紀にかけて活動したアーツ・アンド・クラフツ運動の工芸家達と、20 世紀のリーチ (及びリーチ製陶所) は共に博物館において歴史として語られる段階に入っている。これらの歴史を 21 世紀において如何に語るかに関しては、イギリスでも日本でも視座が必ずしも定まっていないように見受けられるが、「対抗産業革命」はそうした視座の候補になりうると思われる。

② ただし、「対抗産業革命」という共通概念を用いて 20 世紀のイギリスと日本の工芸を論じると、逆に両者の間の差異が顕わになることも判ってきた。民藝運動をアーツ・アンド・クラフツ運動との関連で考える時に興味深いのは、インドのシャンティニケタンにおけるラヴィンドラナート・タゴールの活動である。このタゴールの思想は教え子のレナード・エルムハーストとドロシー・エルムハーストを経て、前述のダーティントン・ホール・トラストの設立理念に繋がっていった。リーチと柳宗悦、濱田庄司は 1929 年と 1952 年にダーティントンを訪れ、その思想に触れた筈である。ダーティントン・ホールは、「西洋」「近代」を批判する思想が「非西洋」の植民地 (インド) から「西洋」(イギリス) へもたらされた事例と言える。

③ これに対し、日本の民藝運動における「西洋」「近代」批判の論調は、ヨーロッパと東アジアの狭間にあって、より晦渋な様相を呈する。確かにリーチからみた場合、日本という「非西洋」の民藝運動を参照することは、イギリスにおける彼の「西洋」「近代」批判の主張を助けたと思われる。しかしその民藝運動の思想は、先に見たとおり、朝鮮半島などの「外地」においてはむしろ、「近代化」や「産業化」の思想と対をなす形で受容されることになり、より複雑な問題を現地にもたらすことになった。「対抗産業革命」という観点から民藝運動を論じようとすると、日本の植民地 (ないし、いわゆる「外地」) の存在の多様性が浮かび上がり、これらは「内地」の諸地方とともに、民藝運動がモザイクのような模様を描きながら各地で展開したことを示す。

三年間の研究により、「対抗産業革命」の理論形成に関する見通しは以上のように広

がり、民藝運動やバーナード・リーチによるその思想の実践に関する分析が進んだ。不完全な形ではあるが、産業革命から情報技術革命に至るまでの歴史を主軸とし、産業革命が人類にもたらした事態とそれに対する人類の対応を、20 世紀の日本とイギリスを題材として、人文科学の立場から考察したこと、その結果、インドや朝鮮における工芸と文化の在り方という問題がうかびあがってきたことは、有意義であった。

研究計画では理論と実践の関係をさらに深いレベルで結びつけ、分析を行う予定であったが、残念ながらその成果を公表するには至らなかった。今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 鈴木禎宏,「大原美術館における白樺美術館所蔵品について　バーナード・リーチ旧蔵オーガスタス・ジョン≪女の肖像（ドレリア）≫とヘンリー・ラム≪浜辺の女達≫、≪浴み≫を中心に」,『大原美術館紀要』、査読無, ３号, 2009 年, 53-133 頁。

② 鈴木禎宏,「時の結び目ということ　情報技術時代の子どもの成長について」、『幼児の教育』, 査読無, 108(1), 2009 年, 22-27 頁。

〔学会発表〕（計２件）

① Sadahiro Suzuki, “Bernard Leach and Korea”, The XIXth Congress of the International Comparative Literature Association, 2010 年 8 月 17 日, 大韓民国・ソウル・中央大学校。

② Sadahiro Suzuki, “Historiography of the Mingei Movement: Conditions and Possibilities”, International Conference of Design History and Design Studies, 2008 年 10 月 26 日, 大阪大学中之島センター。

〔図書〕（計３件）

① 藤田治彦, 川端康雄, 横山千晶, 上羽陽子, 鈴木禎宏, 黒石いずみ, 服部正, 奥平俊六,『芸術と福祉：アーティストとしての人間』, 大阪大学出版会, 大阪, 293 頁（143-172 頁）, 2009 年.

② 魚住和晃, 尾本圭子, 榊原悟, 島田康寛, 鈴木禎宏, 田中修二, 角田拓朗,『日本藝術の創跡　異文化への扉　創造の交流点（2009 年度版 第 14 巻）』, 世界文藝社, 東京, 492 頁（258-263 頁）, 2009 年.

③ Sadahiro Suzuki, "Historiography of the Mingei Movement: Conditions and Possibilities", *Proceedings of the 6th International Conference of Design History and Design Studies*, International Conference of Design History and Design Studies, 532p.(pp. 286-289), 2008.

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　禎宏（SUZUKI SADAHIRO）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：80334564

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し